

まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の、知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。

亀岡の田園：曾我部町

京都大学
 生存基盤科学研究ユニット
 東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・
 「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」

守山フィールドステーション

機械化以前のコメ作り：イナギ

守山 FS 研究員 藤井美穂

ニューズレター No.43 (2012年5月) では収穫作業である田刈りから稲ワラのしまつについて述べた。今回は、稲の乾燥について紹介したい。

滋賀県守山市洲本町開発（かいほつ）集落の A 氏（男性 1926年生）が26歳の頃、A 氏の父親は1町5反の田を所有しており、そのうち1町4反の稲は脱穀した後稲ワラを「イナギ」と呼ばれる4段式の掛け干しをして乾燥させた。残りの1反の稲はモチコメで、刈り取られた穂つきの稲をイナギで乾燥させた。ハサガケはハチク竹^[1]で組んだ1段式の掛け干しで、約20日間乾燥させる。ワラは俵やムシロを作るために用いた。ハサガケをしたコメは美味しかったが、開発集落ではイナギが一般的であった。

イナギは東西に長い田の場合、北側の畔に平行になるように田のなかに作られた。はじめに、約3.5mのヒノキの杭5本を2m間隔に真っ直ぐに立てる。

まず1段目を作る。チョッポイ^[2]の上部を小さいXの形にして、各杭の間に隙間ができないように地面に並べる。つまり、地面に直接チョッポイを立たせるのである。その際、チョッポイを最初の杭の前と最後の杭の後

に2つずつ並べる。チョッポイは表（南面）と裏（北面）がきれいに揃うように気をつける。

次に2段目を作る。4m~4.5mのハチク竹を1段目のチョッポイの上部（2つに分かれた部分）に一本ずつ置いていき、杭と竹をワラ縄でくくって固定させる。そ

の竹の上に2段目のチョッポイを隙間なく並べる。2段目のチョッポイの下部の先は、地面から約20cmの位置になる。3段目と4段目も2段目と同じ方法でチョッポイを並べていく。3段目のチョッポイの上に竹を置いて杭と竹を固定させた後には、最初に立てた5本の各杭の北側から1本ずつ竹で「つんばり」をして、イナギを支えて倒れないようにする。そして、東と西にも一本ずつ竹で「つんばり」をした。

A 氏の家では、ワラが乾くまで10月中旬から正月を越す頃までイナギを置いていたが、3月頃まで見られることもあった。4段式のイナギでは、地面の上にワラを置いている一番下段と雨に濡れる一番上段のワラは乾きにくかった。正月を越してから1月中旬に、早く乾くイナギの中2段のワラを家に運んだ。台所と風呂で使う焚きワラにするために、屋根の「ツシ」^[3]に乗せて保存した。他に牛の飼料や牛舎に敷くために用いられた。イナギの一番下と上のワラは田の肥料にしたり、畑のタタキ^[4]にした。

「田でとれたもんは、あまったら、その田に返すんや。そやから『余りワラ』は、田の肥料にしておくんやな」(A 氏)。

今回は、「カドボシ」というモミの乾燥について述べたい。



写真：稲刈と稲架（いなぎ）
 脱穀した藁を四段にして稲架にかけておく。昭和20年代の風景。
 内田・高橋『ふるさとの思い出 写真集 守山』国書刊行会、1980(昭和55年):34ページからの引用。



絵：イナギ

平成14年10月に行われた、幸津川の暮らしというテーマで60代から80代の6名の方に聞き取りを行った内容への挿絵に描かれたイナギ。「つんばり」がよくわかる。
 守山市誌編集委員会『守山市誌 生活・民俗編』守山市 2006(平成18年):541ページからの引用。

- [1] イナギとハサガケに使った竹は80~100本にもおよび、家の竹ヤブの竹を用いた。竹ヤブがない家は野洲川の土手の竹を利用していた。
- [2] 脱穀をした1把（イネ10株）のワラを6つにまとめたものを「チョッポイ」という（ニューズレター No.43 参照）。
- [3] ワラ葺き家屋の中二階であり、竹で編んである床の上にムシロを敷いて焚きワラを保存した。
- [4] 雨の「トバシル」（雨が降って畑の土を跳ね返す）が作物に当たらないように作物の根元に置く。

逆焼きの技法と草場の焼畑

朽木 FS 黒田末寿

■ 今年は何県の3カ所で焼畑

滋賀県北の長浜市余呉町でおこなう焼畑は、今年で6年目。場所も3年目になった中河内集落南の共有地、新しく加わった中河内集落北にある個人所有の草場、そして中之郷の赤子山スキー場の3カ所に増えた。

新しい焼畑地は、昨年、中河内で収穫祭をおこなったとき、小谷和男さんが「昔よくできたところで焼畑をやらないか」と提案してくださったところで、35°を超すと思われる西向き斜面である。7月25日に4畝ほどを刈り、8月6日にほぼ、50年ぶりになる火入れをし、カブラとダイコンを蒔いた。前日の雨で湿った燃え草が乾くのを待って、ヒグラシが鳴き始める夕方頃、風を見計らい、小谷さんが見守る中、火野山ひろばのメンバーと応援のコイズミ棚田再生研究会のみなさんとで火入れをした。

この火入れの燃え草は、ほとんどがカヤで少しイタドリが混じっているぐらいだった。湿っていた燃え草の天地返しをする際に、燃え草を周辺にはやや薄めにして均等に配分したおかげだろう、炎を絵に描いたようにコントロールでき、きれいに燃えたが、残念ながら上隅に燃えが不十分なところが残ってしまった。

共有地の火入れは、8月11日。永井邦太郎さんと中河内の方々を始め、遠くは筑波大学生の辻本さん、福井焼畑の会の北倉さんたちに、滋賀県立大学・京都学園大学の学生のみなさんと火野山ひろばのメンバーを合わせて50人ほどが参加する盛況だった(写真)。こちらは1反近くの広さで東向きの斜面。ウツギとガマズミの太い灌木と大きなエゴノキが何本か茂っていたが、木枝を十分細かくしておらず、株も切り残したままにしていたため、火がなかなか拡がらず、コツヤキにも難渋した。なんとか夕方までに畝入れ・種蒔きまで終えることができたのは、「こういう時は逆焼きだ」という小谷興一区長のアドバイスと、猛暑にも負けず作業してくれたみなさんのおかげである。

8月19日に予定されていた赤子山の火入れは雨のために延期されたが、8月第4週中におこなわれる予定である。

■ 逆焼き

焼畑の火入れは斜面上方の風下隅から始めるのが鉄則

だが、燃え方が悪いときは火勢をつけるために下から火をつけることがあり、この技法を逆焼き(さかやき)と言うとのことである。共有地の火入れで、私は最初、小谷区長のアドバイスにしたがつたつもりで、上方から5、6m下がったところから火をつけた。これは通常の時にも、燃え下りを均一にして安全性を上げるためにとる方法である。だが、これは逆焼きではなく、小谷さんの指示は最下部に近いところから点火することだった。もちろん、逆焼きは風が強いときにはやってはならない。また、火の扱いになれていない者が上方にいと、煙や熱気に巻かれる恐れがあり、慎重にすべきである。もともと、丁寧に株切りや木枝切りをして、燃え草を散らしていれば使うことがない技法だが、今回はそれが時間の都合でできていなかった。そのおかげというべきか、貴重な体験ができたことになる。

■ 草場の焼畑の見直しが必要

焼畑というと、木を伐採して火入れをするイメージが強い。しかし、この間私たちが火入れできた場所は、木山と言うほどには木が茂っていないし、今年新しく始めた場所付近は、焼畑放棄後50年たっても木らしい木が生えていない。草場の焼畑は、休閑期が短すぎると言われそうだが、ここはそうではないし、土壌は肥えている。新潟県山北町、福井県美山町河内で見えた焼畑地も同様に木が少ない場所であった。こういう場所は、女性でも容易に焼畑ができるので山北町では重宝がられていたと聞いた。雪崩場で木が育たないだけなのか、別の原因があるのか、焼畑の影響と効果を知るためにも綿密な調査が必要である。



写真：共有地での火入れ。火入れが一段落つき、斜面下方から焼畑地を眺める参加者達。

農業塾 2012

京都学園大学 大西信弘

すいたん農園の2011年度の秋～冬の農業塾は、段取り不足と経験不足が原因で、不作な農業塾となってしまった。まず、募集期間が十分でなく、集まった塾生の数が定員を大きく割り込んだ。また、適期から遅れて種をまいたり、日頃のケアが十分でなかったりした。さらには経験者の指導を受けてはいたものの農業経験の乏しいスタッフがいきなり有機栽培にチャレンジした。スタッフ自身が自分たちの力量を自覚せず取り組んでしまったのだ。結局、スタッフが想定していた収穫量には到底及ばず、お詫びとともに、全額返金という事態に至った。

2012年度は、こうした失敗を繰り返さぬよう、気を引き締めて取り組みが始まった。2011年度の多くの塾生に継続して参加してもらえた。そのほかにも、塾生の口コミで参加してくれる人たちもあった。また、スタッフががんばり、企業の参加も得られ、一区画4万円の区画が全35区画完売するまでに至った。これは、今年の農業塾を始めるにあたって、大いにスタッフを勇気づけた。特に、秋～冬の農業塾が不作だったにも関わらず、2011年度の塾生達に継続してもらえたことがスタッフ達の大きな心の支えになった。

8月5日の農業塾で、ほぼ、春～夏までのスケジュールが一段落ついたところだ。春は、ハウス内で昨年度から引き続いてきたイチゴに始まり、ハツカダイコン、コマツナ、レタスを収穫し、路地植のレタス、キャベツ、トウモロコシ、エダマメ、ジャガイモなどが夏までに収穫できた。トマト、ミニトマト、ナスは、現在進行形で日々収穫可能な状況が続いている。できれば、毎日のよ



農業塾でとれたイチゴは、味もさることながら、立派で食べごたえがありました。



ハウスの中のハツカダイコン。収穫後、ピクルスにしたのがおいしかった。

うに塾生が顔を出すことができれば良いのだが、なかなかそうもいかない。しかし、それでは余剰の収穫物ができ、余剰野菜を放置しておく、その後の収穫にも差し支えるので、適宜、穫らねばならない。こういった事情を塾生にも了解してもらい、余剰野菜の朝市への出荷にトライしている。亀岡周辺は、野菜の朝市、無人販売が盛んという地の利を生かした対応だ。出荷した野菜は、完売の報告が多く、農業塾の運用のプラスαとして小さな規模ではあるが「ばあさんの小遣い稼ぎ」的な要素として小さくないポテンシャルが見えてきている。

こうして、塾生の参加により順調に進んでいる農業塾だが、今なお、スタッフの奮闘にかなり依存している。もちろん、ある程度スタッフ達が関わっていくことは必要だ。しかし、2011年度の経験から、スタッフのボランティアではまわしきらなくなるということは予想していた。アルバイトのような形で地元の方をお願いするにしても、どの仕事をどの程度出す必要があるのかという判断が、今回の段階では難しかった。これだけの規模で動いている農業塾なのだから、うまく地域に落とし込んでいきたいところだ。



トマト、ミニトマト、茄子の苗植にとりかかる塾生達。

催しのご案内

■「保津川筏復活プロジェクト2012」のイベント・シンポジウム
9月15日(土) — いかだのってみよう!

1. 時間：13時～16時
2. 場所：保津川下り乗船場向かいの河川敷
3. 保津川の河原でいかだの試し乗り：参加費無料
(試乗記念木製コースター、ひんやり冷たいかき氷付!!)

9月16日(日) — ちいきの大切なものってなんだろう?

1. 時間：13時～16時30分
2. 場所：亀岡市役所市民ホール(亀岡市役所1階)、入場無料
3. 亀岡をはじめ、さまざまな地域の「歴史・文化・自然」について、講演やワークショップを開催します。

★イベント・シンポジウムの詳細は、ウェブサイトをご覧ください。
URL：<http://hozugawa.org/program/ikada.html>

あなたの拾ったゴミが入場券=はだしのコンサート —19回を迎えた琴引浜の手づくりイベント— 東南アジア研究所 中村均司

6月3日、京丹後市網野町にある琴引浜を会場に、「第19回はだしのコンサート」が開かれました。「あなたの拾ったゴミが入場券」を合言葉に、琴引浜を擁する掛津地区とボランティア・アーティストのコラボレーションで開催され、「これだけ長続きしている地域イベントは珍しい」との声が各方面から寄せられています。

琴引浜は、人工の構造物がない自然のままの美しい海岸が保たれ、「日本の渚・百選」、「白砂青松・百選」に選ばれています。また、全長約1,800mの海岸全部が、鳴き砂の浜としても知られ、日本最大級の規模です。こうした貴重さから、「日本の音風景・百選」にも選ばれ、国の天然記念物および名勝に指定されています。

砂の上を歩くと、普通は「ザッ・ザッ」という音ですが、鳴き砂の場合は、「クッ・クッ」という心地よい音がします。この現象は、砂の主成分である石英の粒が振動しあって発する音であるといわれています。きれいな海水と日本海の冬の荒波、砂同士のこすれあい、こうした自然の洗浄作用の繰り返しによって、鳴き砂の浜が保たれているのです。泥やゴミなどの不純物が混じり、砂が汚れると、たちまち鳴かなくなります。

近年、海洋汚染や海岸漂着物によって、鳴き砂の環境は大変厳しいものがあります。1987年、浜周辺のリゾート開発に対する危機感もあって、地元で「琴引浜の鳴り砂を守る会」が結成され、毎日の清掃活動や漂着ゴミの回収、浜後背地への植樹、川の浄化など地道な保護活動が続けられてきました。発足10年目の97年1月、ナホトカ号重油流出漂着事故がおり、浜と鳴き砂は大きなピンチを迎えますが、1万人を超えるボランティア支援を受けた3か月間の重油回収作業で、奇跡的に浜は回復しました。浜での禁煙や花火禁止も呼びかけ、このような地元の浜への思いは、2001年、「禁煙の浜条例」(網野町美しいふるさとづくり条例)の制定と、日本初の禁煙ビーチの誕生につながります。

鳴き砂は、外国ではsinging sandとかmusical sandなど(砂漠の鳴き砂はbooming sand)と呼ばれており、琴引

浜でのコンサートは、自然と人が奏でるsinging beach、musical beachの形容がぴったりです。「浜を楽しみながら守る」という掛津地区の発想は、はだしのコンサート当日の、ビーチマラソン&クロスカントリー、ビーチクリーンアップ(参加者全員 琴引浜での入場料のゴミ拾い)、フリーマーケット、着物のれん町並みづくり、はだしde婚活、などに表れています。コンサートの最後に、地元島津小学校の児童たちと出演アーティスト全員が「琴引浜によせて」を合唱しました。子どもたちによる合唱と元気な宣言は、「子どもたちに美しい浜を残す」という地区の思いが、次の世代にしっかり引き継がれていることを感じさせました。

鳴き砂は、浜の美しさと海水のきれいさの指標といわれています。同時に、この浜で暮らす人々と訪れる多くの人々の鳴き砂への愛着、鳴き砂を守るやさしい心いきが感じられます。鳴き砂は、人々の心の指標といってもいいのではないのでしょうか。来年は記念すべき20回目のコンサートを迎えます。拾ったゴミを入場券に、singing beachへいかがですか。



地元の島津小学校児童とアーティスト全員による合唱「琴引浜によせて」



琴引浜と、参加者一体となったコンサート



出演アーティストは7グループ